

さいたまここに人あり

平和こそ宝

わたしの歩んだ道



掘田シヅエさん

看護婦を目指して

私は1920（大正9）年4月、中国山地の麓の山県郡本地村（現北広島市）で生まれました。私の家は子どもは全部で9人、男5人と女4人で、7番目の私は四女でした。

16歳の時、広島市内の三川町にあった広島看護婦産婆学校というところに入學しました。午前中は小児科の細川医院というところで見習い看護婦として働き、午後は学校へ行って勉強するという毎日2年間続き、卒業後検定試験に合格、一人前の看護婦になりました。

さっそく志願して広島第二陸軍病院に

勤務することになりました。1937（昭和12）年9月のことで、17歳の時でした。病院では白衣に白帽子です。この白帽子というのは、天皇陛下の菊の御紋章を表したとされ、本当に嬉しくて嬉しくて、楽しく一生懸命働きました。

北支の病院で働く

翌年（1938）年、「看護婦募集」に応じ、山東省の北支派遣軍濟南陸軍病院の伝染病棟に勤務となりました。兵隊さんが1日でも早く健康になり、原隊に復帰できることを願いながら一生懸命働きました。7年ほど過ぎた1944（昭和19）年頃になると、戦争は南方にその中心が移り、北支にはいわゆる予備兵といわれる人たちが多くなりました。予備

プロフィール しらさぎ会（埼玉県原爆被害者の会9の会長として永年運営に参加。アメリカに4階、フランス、ドイツギリシャなどを訪れ、被爆証言を通じて核兵器全廃を世界に訴えてきた

兵というのは、年齢も40歳に近いと思われました。出撃しても疲労も激しく、無理が過ぎて下痢をする兵隊さんたちも多く、病原菌が発見されなくても伝染病棟に収容されていました。亡くなる人も多く、その兵隊さんたちの処置をしていると、首から提げているお守り袋の中には家族の写真をみんなが持つておられました。この人は奥さんだね、この人は親だねと言いながら見て、またお守り袋にいれたのを覚えています。そういう写真を下げてみんな死んでいったのです。35とか、36歳から40代の方がたくさん死んでいきました。内地で留守を守っている家族の方々のことを思って、看護婦同士で泣くこともしばしばありました。

帰国、そして保健婦の仕事

この年、実家では兄弟が、男はみんな兵隊になり、女は嫁いだため、「家に誰もいなくなり淋しいので私にもどってきてほしい」と両親から手紙が届きました。広島に帰還したのはこの年の7月。私

は24歳になっていました。内地では今まで考えもしなかった大変な生活が待っていました。「欲しがりません、勝つまでは」の標語がどの家庭でも貼ってありました。食べるものも少なく、食堂の前には、どんぶりを持って雑炊を買う人たちが列を作っていました。北支の病院での7年間、私は毎日白米ご飯で、味噌汁、惣菜、夕食には尾頭付きニシン、イワシやサンマがつき、毎日午後3時になると「加給品」といってカリントウとかビスケット、飴、リンゴ、ミカンなどが季節に応じて配られていました。内地の生活が戦地の病院内とは比べものにならないほど、たまらなく悲惨だったことをはじめ知ったのです。

9月から古市町の保健婦に採用され働きはじめました。古市というのは、広島市の街地からおよそ6・5キロほど離れた町でした。保健婦の仕事は、結核やその他の重病の患者さんたちの訪問ですが、栄養指導なんてできないです。なぜなら栄養があるものといったら卵ぐらいしかないのですから。話を聞いてあげたり、あと事務処理をしていました。看護婦として注射でもなんでも頼まれればしていました。

8月6日の広島

翌年、8月6日午前8時6日午前8時15分を迎えました。あの閃光とドーンという音は、いま思い起こしても忘れられません。古市でも原爆の爆風によって、小さな家の天井は弓のように曲がり、障子は吹き飛ばされ、ガラス戸はめっちゃめに割れました。私はこのとき往診に出っていました。あのキノコ雲を見ながら町役場に駆け付けると、そこに町長さんや助役さんをはじめ、たくさんの人たちが集まっていました。けれどもなにかあったのかみんなわからず、うろろろするばかりでした。しばらくすると道路に大勢の人たちが歩いてくるのです。ただ、髪の毛も眉毛も白くなり、着ている服はボロボロになって、なにかあったのか聞いても「わからないけれど、とにかく熱い風が吹いてきて火事になっていいるからこの道を逃げてきました」と答えるだけです。町長さんの声で町内の櫻鳴小学校に救護所を開こうというので、小学校の講

堂を救護所にすることにしました。

時間がたつにつれ、被災者がどんどん集まってきました。11時頃になると皮膚が水疱になってきて、これは火傷だというので、オリーブ油に亜鉛華を混ぜて赤チンキを入れてチンク油をつくりガーゼにつけてその場所に貼りつけることにしました。患者さんの中には外傷もないのに亡くなっていく人もいます。「○○さん、あの人、口をきかなくなりました。だから死んだみたいねえ」って。「荷物の札を買ってきて名前書いて書こうよ」と、私は荷札を用意して名前を書いて胸に付けて回りました。それから午後2時頃になるとまた空襲警報が鳴りました。救護所の中は、泣き叫ぶ声や怖がったりする声であふれていました。そんな仕事をしているうちに、本当にたくさん死んでいくのです。紫の斑点ができると、翌日は死んでいる。髪の毛も1本や2本じやなくゴソツ、ゴソツと抜けるのです。そうすると「看護婦さん、私も死ぬかね、こんなに抜けたからね」「いやごはんをたくさん食べれば大丈夫だよ」なんて言っても、翌日には死んでいる。治療しようとして包帯をとってみると、傷口からコロコロとしたウジ虫が出てきま

す。生きている人間の身体からウジ虫が出てくるなんて、こんなことがあっていいのだろうかと思いました。夜になってからは電気がないのでランプとロウソクで看護にあたりました。私は三日三晩家には帰ることができませんでした。中国の戦地の病院だってこんな経験は一度もなかったのに、夜になるとあちこちからうなり声が聞こえてきて、もうどうしようもなかったですね。

私自身も8月23日の頃になると、小さな斑点が出てきました。腕からはじめて、もう全身に斑点ができました。それを見て医者藤田さんが「疲れているのだから、少し休みなさい」と言って、ブドウ糖の注射を打ってくれました。体中にびっしり紫の斑点が出てきたときには、ああ自分も死ぬのかなあ、と思いました。

広島は市内を7つの川が流れているのです。本当にきれいな町だったのです。私が子どもの時には今の原爆ドームは産業奨励館といって、いちばん大きな建物だったのです、それを見学に行きました。それから宇品の港を見たりしたのに、その町がこんなにひどいことになったと思つて、母と2人であの焼野原を見たのが

目に焼き付いています。川だけはしっかりと流れていましたが、川の中には死体がまだいくつかありました。美しい7つの川の流れと、すてきだった広島町の並みはすっかりやきつくされてしまいました

結婚そして埼玉で 教師に

1946（昭和21）年、結婚して埼玉にやってきました。25歳のときです。夫は静岡の生まれですが、実は北支の病院で看病した兵隊でした。この時、堀田家は鴻巣町（現鴻巣市）にあり、両親・夫・姉の家族の広川一家4人、伯母・甥の11人で暮らすところへ、台湾からの伯母の長男一家4人などが引き揚げきて、17畳の家に15人が居住する状態でした。このような状態でしたから、生活は戦後の混乱もあってとにかく大変でした。仕事もなく、食べるものもなく、着物をはじめ、家にあるもので役にたつ品物は、次々と食料に換っていきました。遠くの農家までそれを運んでいって、麦やうどん、野菜などの物々交換をしながらなんと

か生活をしているという状態でした。闘屋といっても今の若い人にはわからないでしょうけれど、そんなこともしました。赤羽あたりまでいきました。

そういう中でやっと1949（昭和24）年に小学校の養護助教諭に採用されました。戦争の経験を持つ私は、戦争の時とは180度反対の価値を持つ「民主教育」の方向性に向けて、養護助教諭として課題を深め、一生懸命にその実践に力くみました。

「教え子を戦場に送るな」のスローガンを胸に組合活動にも参加し、兵役をくぐってきた夫の支えの中で、埼玉県教育職員組合支部婦人部長を引き受けた年もありました。6年生には、社会科の時間をいただいで、核兵器のことや原爆の恐ろしさ、とくに放射能が人間の体におよぼす悪影響について語ってきました。教育の現場に「主任手当」が導入され、それ以降なかなか授業としての時間がもらえずに大変悔しい思いをした記憶もあります。その時の県の役人たちとの交渉のことはとても鮮明に残っています。

動 しらさぎ会での活

1956（昭和31）年8月10日に原爆に遭った人たちが集まって、「日本原水爆被害者団体協議会（被団協）」が結成されました。埼玉では、1972（昭和47）年に、会をつくろうということになって集まりました。埼玉に多く見られる鳥の「しらさぎ」から名前をもらい「しらさぎ会」と名付けました。

私自身もこの会の活動に積極的に参加するようになりましたが、学校に勤務している時は時間的になかなか都合がつかず、運動への参加は容易ではありませんでした。けれども教員を退職してから後は、会の理事としてニューヨークの国連本部にもいき、核兵器の恐ろしさや放射能の人間の体におよぼす悪影響について説明し、核兵器廃絶を世界に訴えてきました。アメリカではたくさんの方所で交流集会を開きましたが、いつも「パールハーバーはどうした？」と問われたものです。その時証言している私たち被爆者

は、戦争の被害者の側の意識だけではなく、加害者としての自覚もあわせて持つことの必要性を感じさせられました。

県庁のある浦和の南、別所沼のほとりに「埼玉県原爆死没者慰霊碑」があります。運動を続ける中で、県内でも「原爆の犠牲者を慰霊する碑をつくろう」という話が出てきました。県内の市町村や県民に呼びかけた結果、500万円ほどの寄付が集まり、ここに完成しました。「国際平和年」だった1986（昭和61）年のことでした。

2011年、福島で原発事故が起こり、考えました。私自身は日本の原発をゼロにし、世界から原発をなくすこと、これこそ今私たちが緊急にとりくまなくてはいけない大きな課題だと思いましたが、それは核兵器をなくすことに向けた運動と重なることだと思っています。

平和こそ宝です。70年以上戦争のない平和な日本です。戦争こそ最大の不幸をもたらします。戦争を起こしてはならないと思います。憲法九条を守り、平和な日本をつくっていくことを強く願っています。